

## ROSEリポジトリいばらき (茨城大学学術情報リポジトリ)

|            |   |
|------------|---|
| Title      | ワルデマル・ボンゼルス(Waldemar Bonsels)の作品-4-   |
| Author(s)  | 北垣. 篤   |
| Citation   | 茨城大学文理学部紀要. 人文科学(13): 69-79   |
| Issue Date | 1962-12   |
| URL        | <a href="http://hdl.handle.net/10109/10174">http://hdl.handle.net/10109/10174</a> |
| Rights     |   |

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課(図書館) 情報支援係  
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

# ワルデマル・ボンゼルス (Waldemar Bonsels) の作品 (4)

北 垣 篤

## I. **Narren und Helden** (1923年初版発行)。

ワルデマル・ボンゼルスの三部作 „Aus den Notizen eines Vagabunden“ のうち, „Menschenwege“ (1918年初版発行) は, さきに茨城大学文理学部紀要 (人文科学) 第 9 号に, その作品の概要の紹介と, わずかばかりの批判をのせた。しかし, そこで, „Aus den Notizen eines Vagabunden“ をうかつにも, „Menschenwege“ の副題とかいたのはあきらかに誤りであるから, ここに訂正しておく。„Menschenwege“ は今までに, アメリカ合衆国, ロシア, オランダ, スペイン, ハンガリヤ, ポーランドなどの国語に翻訳されている。

„Menschenwege“ について, 文学史による紹介と, 戦後 Deutsche Verlags-Anstalt, Stuttgart が 1952年にこの本の版權を確立したときの内容紹介を記録として, ここにかかげておく。

a) Franz Lennartz: Deutsche Dichter und Schriftsteller unserer Zeit. Der erste Band, Menschenwege (18), lässt dem Weltenwanderer und Gottsucher Heilige und Verworfenen begegnen und unbeirrt im Menschen die Spur Gottes suchen und finden: „Die besten unserer Zeiten sind Vagabunden“.

b) Deutsche Verlags-Anstalt, Stuttgart: Diese Notizen eines Vagabunden stellen die Erlebnisse eines Menschen dar, der die Welt unserer Zeit in einer überraschenden inneren Freiheit den Ansichten, Vorurteilen und Gesetzen unseres Herkommens gegenüber durchwandert, und in dessen Gemüt sich die Erscheinungen darbieten, als gäbe es keinen Widerhall als nur den der unverfälschten menschlichen Natur. Es entsteht dem Leser langsam ein Weltbild, dessen Mittelpunkt die Liebe ist, und in diesen Strahlen verwandelt sich die Fülle der Erscheinungen in eine Einheit hoher sittlicher Forderung. Man ist versucht, die Betrachtungsart dieses unbeirrten Wanderers als eine Scheidung vergänglicher von unvergänglichen Dingen aufzufassen, und das Menschentum dieser Lebensweise wirkt überraschend, neu und herausfordernd. Der Inhalt des Buches bietet sich uns in der bunten Fülle der Erscheinungen und des anschaulichen Erlebnisses dar; denn dieser Vagabund in Lumpen über einem empfindsamen Herzen berichtet in seinem Buch von den seltsamsten Begegnungen auf seiner Wanderschaft mit Heiligen und Verbrechern, mit Frauen und Dirnen, mit Toten und Lebendigen, mit der Natur, mit Tieren und mit Gott. Die Wesen, die ihm auf seiner scheinbar so ziellosen Wanderung begegnen, muten wie Gestalten aus

einer Legendenwelt an und sind doch die Geschöpfe unseres Lebens und unserer Tage. Die Offenheit dieses merkwürdigen Menschen, vor dem alle Schranken der herkömmlichen Lebensart zu fallen scheinen, führt ihn in dunkle Gassen und durch trübe Nächte, unter dem Sommerhimmel dahin, durch Städte und Wälder, in Schlösser und Hütten, und was ihm begegnet, wird beredt und scheint ihm auf die eine grosse Frage seines suchenden Geistes zu antworten, auf die Frage nach der Erlösung des Menschen.

この小論では、第2巻の „Eros und die Evangelien“（1920年初版発行）につづく、さいごの作品 „Narren und Helden“ について、おなじく内容の紹介と評論をこころみようと思う。この作品も „Menschenwege“ と同様に、およそ作品のロマン的な興味を追求しようとするならば、わたしたちはたんに失望と幻滅を味わうだけにおわるであろう。

„Narren und Helden“ は „Die Stadt am Strom“ と „Gregor“ の2部にわかれている。これらはふたつとも、ひとりのかなり教養ある若ものが都市やいなかを放浪してあるき、まったく見ずしらずの他人の好意にあまえて、食事とベッドを与えられながら、彼がめぐりあった人物とのあいだに展開された道徳論、教育論、芸術論、人生論といったものをかき表わしたものである。しかし、ボンゼルスがこの作品のなかに盛った内容と、その表現形式はわたしたち東洋人にとっては、きわめて親しみにくく、人によってはさいごまで読みとおす興味と忍耐をもちつづけることが、できないであろう。

„Die Stadt am Strom“ の章は、ひとりの年若い放浪者の思想と、魅力的で不可解な若い女性エルゼの人生観と彼女の心のなかに起ったできごととの交流が中心として描かれている。作品のなかの放浪者の回想は、彼が夏のあいだ、大自然の森のなかで生活したあとで、周囲の風物が秋の色をおびはじめた頃、ある河沿いの都市に着いたところからはじまる。そこで、まずはじめに、放浪者はいなかの人びとのもつ顔の表情とか気風と、都会の人のそののいちじるしい差異に気づくのである。放浪者は、沼沢地で泥炭堀りの過重な労働をしたために病気になる、秋風がたちはじめたある日の夕やみせまる頃、とある家の戸口のところで行き倒れになった。そこに立ちどまった、ふたりの人間のかわす会話のようすから、彼らは若い恋人同士のもようであった。なかば意識をうしなった放浪者の体の上に、赤い光がかがやき、慈愛ぶかいまなざしが彼の顔をのぞきこみ、彼の母よりも愛情にあふれた手が、彼のひたいの上をなでた。男のほうは、この病人を助けることに賛成しなかったが、若い女は病人の体を肩の上にかくみにかつぐようにして、じぶんの部屋にはこびいれて看護することになった。彼女はその晩から、放浪者の身心がほぼ回復するときまで、いっさいの世話をみたのである。たったふたつしかない部屋のうち、病人は女のベッドを占領し、彼女は隣室の安楽いすの上にもねる生活がはじまった。放浪者が意識をとりもどしてから、いく日かたったある日、彼を看護することに賛成しなかった男の名まえはヤノートといい、エリオという他の女の愚行のために、むこう3ヶ月のあいだ、獄につながれることになったと、しらされた。さらに、放浪者はエルゼの口から、ムックという女性とラッソーという美少年のはなしをきいた。エルゼとヤノートの友人である少女のムックが救世軍にはいり、彼らに神の福音をもたらすために、パンフレットなどをもって二人を訪ねたとき、ヤノートは彼女を抱きあげ、エルゼのみている前で接吻してしまった。これにたいして、エルゼがすこしの反応も示さなかったのは、じつに不可解である。さらに

エルゼが朝の散歩のとちゅうしりあった、ラッソーという魅力的な少年の絶望と自殺、むすこの死後に、エルゼを訪問した彼の父親の高貴な精神の描写は、読者の心をうつものがある。

放浪者はエルゼのところに、彼女のあたたかい看護をうけながら厄介になっていくあいだに、しだいに体も精神も健康になり、エルゼの存在によって味わう幸福感、安心感、信頼感は、ますます高まっていくばかりであった。が、そうしたある日のこと、エルゼのるすちゅうに、ジューセンフトという男がエルゼを訪ねてきて、放浪者のねていたへやのなかを胡散くさげにみわたした。そのとき、ジューセンフトのはいたことばは、彼の心のなかに疑惑をおこさせた。つまり、もし彼がジューセンフトとエルゼとの結婚の成立をとりもってくれるならば、しゅうぶんな報酬をおしまないといったからである。その日、エルゼが帰宅したとき、彼はジューセンフトの用件を彼女に伝えた。彼女はそれをきいて、べつにおどろいたようすもなかったが、彼の住所をしきりにしりたがった。その日、ヤノートは出獄したが、その夜はエルゼは帰宅しなかった。その翌朝、エルゼがもどってきて、ジューセンフトが水死体となって発見された新聞記事を彼にみせた。エルゼはこの家をさり、放浪者だけがそこにとりのこされた。彼もこの家をでて、新しい生活をはじめするために、街を歩いていたときエリオにであった。エリオは前にエルゼのるすちゅうに、彼とあったことがある。エリオは彼をとあるベーカリーに誘い、彼女がヤノートとしりあったいきさつと、彼女の愚行がわざわざいしてヤノートが投獄される羽目になり、彼女の家のものは、今はひとりとして彼女を相手にしなくなって孤独であると、ものがたった。

„Die Stadt am Strom“ の章においては、作者の注目にあたいる思想なり、見解なりが、放浪者と彼のであった人間との会話のなかに、かなり多くみうけられる。それらは、あるいは Tugend の問題、あるいは人間の善と悪についての考え（ボンゼルスは schlecht という概念と böse という概念を、ある条件のもとに区別している）、あるいは彼の芸術観などにおよんでいる。これらについて、いま詳論することは、かならずしも必要であるとは考えない。が、それらを通して、作者の1910年代の末から20年代のはじめにかけての、思想のかなり重要な部分をうかがいしることができる。

„Gregor“ の章は、„Die Stadt am Strom“ よりも理解しやすい。放浪者は心身ともに回復し、都会の騒音やわずらわしさをさげ、大自然の荒地へと足をふみいれた。彼は荒地のなかの、とある居酒屋にはいり、老婆の好意によって、一夜の宿と食事を与えられた。老婆に彼女のむすこからの手紙をよんできかせてくれとたのまれたので、彼はその手紙の差出人の名前がグレゴールであることをした。放浪者は老婆の願いによって、ある村にいたるグレゴールを訪ねる気持になり、農家の一室に住んでいるグレゴールをさがしあてた。グレゴールは、荒涼としたこの村でかつて教師をしていたけれども、今は村からの慈善によつて生活している男である。彼は児童の教育が放任主義であったために、子供たちの生活が規律と徳をうしない、怠惰と奔放の気風が彼らを支配するにいたったという理由で免官となり、彼のかわりに現在の教師が赴任したのである。だから、後任の教師はグレゴールをさげすんでいる。村の教会の牧師は、グレゴールの在職ちゅうに、彼の教育上の行動を寛大な態度で弁護しつづけたために、グレゴールの免職によって、牧師はおおきな償いを果たさねばならなかった。ところが、皮肉にも、グレゴールが教職の地位を追わ

れたときに、学童たちは、当局が彼にたいしてとった処置に反抗のけはいを表明したのである。そのご、新任の教師が校内に規律と徳が確実に行なわれるようになったと信じてから、児童たちの顔の上には悲しみの色がこくなつた。児童たちの顔から、その悲哀の色を消さろうとして、教師は軽い冗談などをとばして、子供たちの顔色をみるようになった。放浪者はこの教師から毎日食事をめぐまれ、庭園内にしつらえたベッドにねることをゆるされる。毎夕食後、放浪者と教師夫妻とのあいだに、グレゴールのことが話題にのぼったが、教師はいつでも、グレゴールがかつて行なつた教育を非難した。そのつど、放浪者はこれに反論をこころみたのである。ここで、教師と放浪者のあいだに、教育上の論争が展開されるのが常であった。ところが、ふしぎなことには、教師の妻は彼女の夫のるすちゆうは、放浪者にたいして、夫の教育上の方針や行爲を弁護したけれども、グレゴールにたいしては、彼女は暖かい寛大な態度をいつでも表明した。

放浪者はある日のこと、教師の妻にさそわれて森のなかへ散歩にいったとき、グレゴールが子供たちと無心にあそんでいるのを見て、彼が子供たちにたいして、いかに強い影響力をもっているかにおどろいた。放浪者は今まで教師やその妻から与えられていた先入観をかなぐりすてて、グレゴールの内気で純粋な魂をすなおに受けいれようと決心したとき、グレゴールをみてきた不信の念が消えさってしまった。さいごに、瀕死の床の上にあえいでいた村の老牧師がグレゴールにあいたいとさげんだ。放浪者がグレゴールを病人のへやのなかにいれ、彼がベッドの上に、さいごの力をふりしぼって立ちあがった牧師を抱いたが、彼の顔のなかには、感動の色がすこしも現われていなかった。やがて、放浪者は新しい生活をもとめて、この荒地と教師の家に別れをつげた。

わたしは „Die Stadt am Strom“ の章と „Gregor“ の章のなかで、だれがいったい勇士で、だれが愚者であるかを考えてみないわけにはいかない。„Die Stadt am Strom“ のエルゼは、たしかに複雑な心理の持主で、きわめて寛大な心の女性であるから、彼女を勇士とよぶならば、ムックやエリオやラッソーやジューセンプフトなどは、愚者とよばねばならないのだろうか？ „Gregor“ のなかでは、ものがたりの主人公グレゴールは、村人からも、彼の後任の教師からも、おろかもと軽蔑されていながら、他方においては、子供たちの純粋な心をひきつける強大な力をもっているのだから、ひとりの人間が勇士と愚者をかねているわけである。あるいは、新任教師の妻エリザベートが、グレゴールにたいしてもちつづけていた、女性には珍しい勇氣ある態度と、老牧師の臨終のさいにとつた決然とした処置などから考えあわせてみると、わたしたちは彼女を真の勇士とよぶべきであろうか？ とにかく、 „Narren und Helden“ という表題は、ちょっと理解にくるしむ題名である。

„Narren und Helden“ については、Franz Lennartz の „Deutsche Dichter und Schriftsteller unserer Zeit“ のなかに、ほんの簡単な紹介しかのっていない。

„Im dritten Band, *Narren und Helden*, führt ihn sein Weg zunächst in eine Grossstadt, wo er erkrankt und von der Geliebten eines Verbrechers gepflegt wird, und schliesslich in ein Dorf zu einem Lehrer; der weite Kreis von kraftvoll wirkenden Bösen bis zum Heilig-Untätigen wird ausgeschritten.“

## II. Eros und die Evangelien (1920年初版発行)

„Aus den Notizen eines Vagabunden“ の第2巻である „Eros und die Evangelien“ は、作者の作品発表の時間的な順序からいえば、„Narren und Helden“ の前に論ずるのが当然であるが、その原書が手にはいらないので、貧弱ながら、文献表示的な意味で、二つの紹介文を原文のままのせておくこととする。

a) Franz Lennartz: Deutsche Dichter und Schriftsteller unserer Zeit から。

**Eros und die Evangelien** berichtet von der bleibenden Liebe in der Seelenfreundschaft mit einer Sterbenden und von der vergänglichen Liebe in der freien Bindung an eine junge Aristokratin.

b) なお、この作品の初版がでた当時、ベルリンの „Die Hilfe“ にのつた書評をもここに紹介しておく。

Dieses Buch ist noch vergeistigter als die „Indienfahrt“ und die „Menschenwege“, noch helllichtiger im somnambulen Durchdringen der irrationalen Welt der Beziehungen und geheimnisvollen Seelenkräfte, noch verblüffender in der kühl sachlichen Blossstellung des Innersten. Die erhabene Melodie der Gelassenheit und Geborgenheit gegenüber der letzten Entscheidung in unserem Leben klingt an, wenn Waldemar Bonsels von der Liebe des Lebens und der Liebe über das Leben hinaus spricht. Er ist eine Inkarnation des sittlichen Unterbewusstseins der verworrenen Gegenwart, einer der Ersten in der Gotik, die eben in der deutschen Dichtung anzubrechen scheint.

## III. 詩 について

ワルデマル・ボンゼルスの詩集としては、下にかかげるようなものがあるが、第二次大戦後は、そのいずれも絶版となった。ただ、わたしが手にいれることができた詩集は、ボンゼルスが他界した年にでた限定版 „Den Freunden der Deutschen Verlags-Anstalt im Todesjahr von Waldemar Bonsels 1952“ だけである。だから、ここでは、この詩集と彼の „Die Biene Maja und ihre Abenteuer“ や „Himmelsvolk“, それに彼の Essay 集ともいえる „Efeu“ (Erzählungen und Begegnungen) などの作品にでてくる詩についてだけのべることとする。

a) 詩 集

Don Juans Tod. —Epische Dichtung. 1909

Das Feuer. —Dichtungen. 1910

Don Juan. —Epos. 1919

Norby. —Eine dramatische Dichtung. 1920

Weihnachtsspiel. —Eine Dichtung, (Musik von Hermann Ungar) 1922

Zwischen Traum und Tat. —Dichtungen und Lieder. 1940

Den Freunden der Deutschen Verlags-Anstalt im Todesjahr von Waldemar Bonsels 1952.

b) Märchen や Fssay などのなかに現われた詩

漂泊の詩人ワルデマル・ボンゼルスは、魂のふるさとを持たなかつた。彼の生命ともいうことのできる太陽への賛歌と、その恩恵に浴しないでは生きられない大自然の生命の美をうたった詩が多いのは当然であろう。そして、大自然の被造物の死と、詩人のさいごはたがいに直接の関連の意味を持つている。

Alles steht in gold und grün  
warm und sommerlich.

Nur solange die Rosen blühn,  
ist es schön für mich.

Meine Heimat weiss ich nicht,  
köstlich ist mir dies:  
dass ich so im Rosenlicht  
meinen Tag geniess'.

Wenig weiss ich von der Welt,  
wo ich glücklich bin.  
Wenn die Rose welkt und fällt,  
muss auch ich dahin.

(Aus „Die Biene Maja und ihre Abenteuer“)

„Die Biene Maja und ihre Abenteuer“ はたんに、ミツバチのマーヤの遍歴や冒険を童話ふうにおもしろくかいてあるばかりでなく、じつは詩人の魂が大自然をさすらい歩いたありさまと、大自然の美にたいする感謝をうたっているように感じられる。

Lieulich ist der stille Fluss,  
wenn der Morgensonne Gruss  
seine Flut getroffen.

Wo der grüne Schilfhalm weht  
und die Wasserrose steht,  
weiss und gelb und offen.

Warmer Duft und Wind uud Flut,  
auf den Flügeln Sonnenglut  
und im Herzen Freude.

Ach, das Leben ist nicht lang,  
goldner Sommer, habe Dank,  
herrlich ist es heute.

(Aus „Die Biene Maja und ihre Abenteuer“)

„Die Biene Maja und ihre Abenteuer“ の姉妹篇である „Himmelsvolk“ (Ein Märchen von Blumen, Tieren und Gott) の主役を演じている「花の精」は、ミツバチのマーヤとであったときに、つぎのような歌をうたっている。詩人のあこがれが光であり、彼の魂は神の被造物である大自然の美からもれるいぶきであると、うたっている詩はまことに絶唱である。

Meine Heimat ist das Licht.  
Heller Himmel meine Freude.

Tod und Leben wechseln beide,  
aber meine Seele nicht.

Meine Seele ist der Hauch,  
der aus aller Schönheit bricht,  
wie aus Gottes Angesicht,  
so aus seiner Schöpfung auch.

(Aus „Die Biene Maja und ihre Abenteuer“)

„Himmelsvolk“ の „Ukus Nacht mit dem Elfen“ の章においては、人間とおなじ感情をもつように変わった花の精が、前半はミツバチのマーヤとのであいに歌ったのとまったく同じ心を歌いながら、後半は現世の宿命が悲哀であるとあきらめ、それをのりこえようとしている。ここでは、詩人の人生観のはっきりした一面がうかがえるのである。

Meine Heimat ist das Licht,  
heller Himmel meine Freude!  
Tod und Leben wechseln beide,  
aber meine Seele nicht.

Trauer du, mein irdisch Los,  
über deinen bitteren Gaben  
will ich meine Seele gross,  
will sie stark und glänzend haben.

(Aus „Himmelsvolk“)

„Himmelsvolk“ の序章とみなすことができる „Die Waldwiese“ では、冬を越したヒナギクの願いと希望は、そのまま詩人の太陽への賛歌であり、創造主のくすしみわざの賛美である。

Alle, die wir Blumen sind,  
bitten Gottes Segen,  
dass uns Sonne, Tau und Wind  
heute finden mögen.

Goldne Sonne, mach uns weit  
deinen Strahlen offen,  
wie auf deine Herrlichkeit  
alle Wesen hoffen.

Himmelswunder, kühler Wind,  
Tau aus deinen Schwingen,  
wiege unser Leben lind,  
lass den Tag gelingen.

詩人ボンゼルスの太陽への愛と信頼の感情は、おなじ „Himmelsvolk“ の „Der Maikäfer“ の章において、ますます高揚され、その頂点に達した感がある。

Schliess mich wieder ein in deine Freude,  
deine Anmut, deinen hellen Sinn,  
dass ich mich in deinem Glück bescheide



und empfinde, dass ich glücklich bin ;

Dass ich selig deine Kräfte schaue  
und des Herzens Trauer, wie ein Lied,  
deiner Stille, deinem Licht vertraue,  
deinen Glanz im fröhlichen Gemüt.

Keine Liebe hat mich überwunden,  
so wie deine es am Morgen tut.

Sieh mich offen und zu dir gefunden,  
und mach' meine Seele hell und gut.

ボンゼルスは16篇のエッセイを集めた „Efeu“ のうちの „Das ewige Angesicht“ においては、クリスマスの持つおおきな力についてのべているうち、いきなり „Ereude“ という語の絶妙さを歌っている。

Was wussten wir von diesem Licht,  
als wir in ihm noch schritten ;  
da wir sein Herz und Angesicht,  
im Freudenrausch erlitten.

Erinnerung, mach die Seele still !  
Nur einmal noch, nur heute ;  
so klingt, was ich am liebsten will  
im dunklen Nachtgeläute.

Das Wort ist arm, die Zeit ist laut,  
es ist mir nicht gelungen . . . .  
Und doch und doch bleibt mir vertraut,  
was einst so rein geklungen .

(Aus „Efeu“)

c) „Den Freunden der Deutschen Verlags-Anstalt im Todesjahr von Waldemar Bonsels 1959“

これはボンゼルスの晩年の詩集である。時期の上では、1944年から1950年までのあいだの作品をおさめてあるが、ボンゼルスじしんがこれらの詩をえらんだものであろう。この期間は、詩人の創作活動がおとろえて、無為に余生を安楽におくっていた年月であるなどと、軽率な判断をくだすことは誤りであろう。なぜならば、彼はつぎにあげるような、きわめて注目にあたいする作品を発表しているからである。

Knorrhertz und Ermelinde. 1944

Mortimer. 1946

Runen und Wahrzeichen. 1948

Dositos. 1948

それどころか、この期間においては、ボンゼルスのライフワークを飾る大作 „Das vergessene Licht.“ (1951年発表) の骨組をなす „Dositos“ が完成されているほどであるから、彼の創作活動の頂点といえることができるであろう。

ワルデマル・ボンゼルスは1952年7月31日に彼の人生の幕をとじた。この晩年の詩集の

なかには、彼の死がすでに身近にしるしよっていることを、はやくも予感した、一種の悟りにもいた詩がはいっている。ボンゼルスは、東洋の多くの詩人とおなじように、人生をみじかい旅路とみているが、その終着点である死は、悲哀でも暗闇でもなく、それは栄光であり、神を心にいだこうとする信仰と勇気をもつものにとっては、神は存在し、到来するであろうと歌っている。詩人は、はかなく、滅びやすいものと、永遠不滅の存在であり、万物の創造の原動力である神を対比させている。彼はつねに疑問を提示し、肯定的な答えを与える。人生の終局にちかづいた詩人と、彼のあゆんできた人生のできごとについての神とのしずかな対話、創造の星座をふかい心でみつめる詩人の自然観、この世の成功、失敗、喜びや悲しみやさまざまなできごとについて、終始謙虚な祈りの精神をうしなうまいと努力した詩人の態度も、この詩集のなかに歌われている。

## DAS EWIGE JA

Nun ist der letzte Weg verschneit,  
der Blick versinkt in Weite.  
Der Tod in seiner Herrlichkeit  
geht ruhig mir zur Seite.

Es dringt kein Laut an unser Ohr,  
auch unser Schritt geht leise. —  
So sag' was galt es denn zuvor,  
auf dieser kurzen Reise ?

Wen rufst du an, wenn du so fragst,  
mein Herz, ins All verschlagen ?  
Nur Gott will hören, ob du wagst,  
ihn noch in dir zu tragen.

So sag' nun ja, und tu es auch.  
Er wird nur sein und kommen,  
wenn er von deiner Lippen Hauch  
dies letzte Wort vernommen.

Februar 1944

## PAN

In Sturm und Feuer siegten sie,  
die Einen mit Trompeten,  
die Andern mit Gebeten,  
bis meine Flöte klang.

Aus Gold und Asche sank das Haar  
auf blasse Knospen wunderbar . .  
wenn mein Flöte klang.

Und mehr als das, ich sag' es nicht,  
die Wohnung Gottes lag im Licht,  
wenn meine Flöte klang.

W. D.

Aus den Gedichten zu den kosmischen Legenden.

So lasst doch euren Zweifel,  
den kläglichsten Beruf!  
Nie, niemals geht zum Teufel,  
der Geist der Grosses schuf.  
Mag auch das Werk vergehen.  
So sagt mir doch: Was bleibt?  
Nie wird der Geist verwehen,  
der zum Erschaffen treibt.

Dunkel weht der kühle Wind von Norden,  
und der bunte Sommer sank dahin.  
Und es ist nun langsam so geworden,  
Herr, dass ich mit dir alleine bin.  
Immer ist der rasche Sinn genesen,  
wenn ich sagte, was du mir gezeigt.  
Ist schon je ein Weg so schön gewesen  
und sein Ende so von Herzen leicht?!

1948

## AN DIE GESTIRNE

Weil ich euch innig erschaut,  
eure Bewegung und Ruh,  
bleibt ihr mir freundlich vertraut,  
und ich gehöre euch zu.  
Und eure Stille trägt gern  
hoch über Schlaf und Verfall,  
weit über Nahe und Fern,  
auch meine Liebe ins All.  
Ach, euer Wandel und Pfad  
führt als lebendiges Glück,  
ohne die heilige Saat,  
niemals zum Vater zurück.

W. B.

Oktober 1949

Der Sirius war der erste Stern der kam,  
die Erde lag in Abendrot und Grün.  
Noch schimmerten die Blüten, wie mir schien,  
so rein und fremd, wie auch mein Gram,  
weil ich nun endlich Abschied von dir nahm.  
So sag mein Herz, wo wende ich mich hin,  
da ich von Ferne ganz umschlossen bin.

Mir war's gegeben, dies zu überbringn. —  
Was soll dein liebes Wort von Ehre heissen?  
Sprich, wenn du willst, von glücklichem Gelingen,  
das mag als letzter Schein auf meinen weissen  
Haaren noch ruhen, aber meine Hände  
sind noch gefaltet, wie am ersten Tag.  
Und werden also sein, an meinem Ende.  
Denn als das erste Licht auf ihnen lag,  
erschien es mir, als müsste ich sie beide  
auf solche Weise fesseln, dass dem Leide,  
wie auch der Freude, die hernieder brach,  
und auch den Bildern, die mich überkamen,  
kein Tun geschehe, ausser ihren Namen.

Ambach, Mai 1950

1962.8.28 未完